

そうなると王子は、なおさら行きたくて、毎日毎日「どうか行かせて下さい。たった三回位のことですもの。絶対ねむりません。」と言いながら、王さまにつきまたって、ねだりました。さすがの王さまもとうとう根負けをなさって、それでは好きにするが良いと、しかたなしに、こうおっしゃいました。王子は大よろ

こびで、お金入れへお金をどっさり入れて、それから、よく切れるりっぱなけんをつるすが早いからおともも連れなないで、大いさみにいさんで出かけました。王子は遠い遠い長い道をどんどん急いでいきました。すると二日目にと中で一人の太った男に出会いました。その男はよっぽどからだが重いと見えて、足を引きず

るようにして、のっそりと歩いていました「もしもし、おまえさんは、どこまでいくのです。」と王子はその男に話しかけました。「わたしは、しあわせというものを、さがしに世界中を歩いているのでございます。」と、その太った男がこたえました。「一体あなたの商売は何です。」と王子は聞きました。「わたしの